令和３年　科学研究費基盤研究Ｃ研究課題番号　21K2101002

人文資料形成史における博物館学的研究 I

－ 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 －

2021

近代博物館形成史研究会

人文資料形成史における博物館学的研究　Ⅰ
― 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 ―

2021

近代博物館形成史研究会

例　言

1. 本報告は令和３（2021）年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究Ｃ（令和３年～令和５年）課題番号 21KK01002「人分資料形成史における博物館学的研究 - 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 -」の令和３（2021）年度研究成果報告書である。
2. 研究対象としている根岸家の現当主である根岸友憲氏には、全面的なご協力を賜った。
3. 研究組織（近代博物館形成史研究会）は、以下のとおりである。

研究代表者　内川隆志（國學院大學文学部教授）
研究分担者　三浦泰之（北海道博物館学芸主査）
研究協力者　新井端（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）
森田安彦（熊谷市文化センター所長）
徳田誠志（宮内庁書陵部陵墓調査官）
長谷洋一（関西大学文学部教授）
堅田智子（流通科学大学商学部専任講師）
深澤太郎（國學院大學研究開発推進機構准教授）
成澤麻子（公益財団法人静嘉堂文庫司書）
山本命（松浦武四郎記念館学芸員）
五十嵐聡美（北海道立三岸好太郎美術館副館長・学芸員）
鳥越多工摩（國學院大學研究開発推進機構客員研究員）
鎌形慎太郎（國學院大學大学院修了）
Ilona Bausch（ライデン大学日本研究科講師）

4. 本書の編集は、内川隆志が行った。
5. 本書を編集するにあたり下記の諸氏、機関よりご協力を賜った。心より御礼申し上げる次第である。高橋桃子（茅ヶ崎市教育委員会）・富山悠加（國學院大学大学院博士課程前期修了）・楠惠美子（大田区教育委員会）・篠田浩輔（國學院大學大学院・博士課程前期）・植田真（株式会社パスコ）

目　次

研究の目的と経緯　内 川 隆 志 …… 1

根岸邸の古器物陳列場について　新 井 端…… 2

根岸武香旧蔵の重圏文鏡について　徳 田 誠 志 …… 12

『榧園好古図譜』に所載された和鏡について　内 川 隆 志…… 27

根岸武香旧蔵松浦武四郎画「アイヌ舞踊の図」について　五 十 嵐 聡 美…… 32

研究の目的と経緯

内川　隆志

本研究は、近代博物館揺籃期において博物館創設、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新期からの好古家の功績を考究することを目的としている。近代博物館制度ならびに文化財保護制度は、殖産興業政策の下、西欧を見倣い明治新政府の号令一下創設されたかに映るが、現実的にその根底を支えたのは近代以前の国学の伝統を身につけた数多の好古家であり、彼らの後立てなくしては成し得えるものではなかった。本研究では埼玉県熊谷の好古家、根岸友山（1810-1890）、根岸武香（1839-1902）父子に焦点を当て、今も根岸家に現存する古器物、記録類の実態と根岸父子と交流のあった知識人同士のネットワークを追求しその実態を顕かにするものである。冒頭に記した従来の日本博物館史研究で顧みられなかったこの視点は、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期における人文科学そのものの成り立ちを考える上でも重要な研究といえる。

平成 21（2009）年、東京世田谷に所在する静嘉堂文庫で、幕末から明治を生きた好古家松浦武四郎（1818-1888）の実像を具体的に明らかにできる新たな資料が出現した。申請者は、同年より静嘉堂文庫のご理解、ご協力の下これらの資料整理を敢行し、平成 25（2013）年に目録を出版し、加えて静嘉堂文庫美術館での展示によって、このコレクションが世に知られるようになった。以降、武四郎コレクションを核として本研究の眼目でもある「近代博物館創設の揺籃期において、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新期から続く国内外の好古家の活動に関して考究する」ことを継続して研究している。平成 27（2015）年には、彼らに影響を与えた H.v. シーボルト（1852-1908）等の外国人の存在があった事についても言及し國學院大學において武四郎と古物を通じて交流した彼のコレクションや学問形成に大きな影響を与えた P.F.v. シーボルト（1796-1866）のコレクションを有するヨーロッパの研究者を招聘し、よりグローバルな視点で、明治初期の好古家、文化財を考える国際シンポジウム開催した。平成 28（2016）年には、オランダ・ライデン民族学博物館に収蔵されている P.f.v. シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行、その実像に迫ることが出来たのである。平成 29 年（2017）度からは、「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（基盤研究 B　研究課題番号 17H02025 研究代表　内川隆志）を推進し、日本近世史・日本近代史・ヨーロッパ近代史・ヨーロッパ考古学・中国考古学・日本考古学・博物館学・文化財学等の多様な専門家による研究体制を整え、総合的観点から ① 近世後期の「物産会」から近代博物館制度、文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探る。② 好古家蒐集古物の調査研究と国内外における好古家ネットワークの研究を柱に研究を推進してきた。平成 29 年（2017）度には、大英博物館が所蔵している H.v. シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行し、上記の成果はすでに HP 上（http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/）で報告している。このように、平成 21（2009）年以降、近代における好古家ネットワーク研究を推進する調査の過程で、埼玉県熊谷市に住した好古家、根岸友山、武香父子の蒐集したアーカイブを含む多数の考古、工芸資料が、その生家に未だ未整理の状態で温存されていることが根岸家の現当主である根岸友憲氏から頂戴したお便りによって判明した。加えて科研基盤研究 B の成果として令和 2（2020）年に國學院大學博物館において企画展「古物を守り伝えた人々 - 好古家たち」を開催した際に、根岸家より資料の一部を借用し公開させて頂く中で、友山、武香を周る好古家との接点を検証する資料が多数認められることから同家ご当主である根岸友憲氏の賛同を得て研究を実施し、学術的評価を加え、その成果を公にすべきものと判断した次第である。さらに、同家の資料調査をすでに推進されておられた新井端氏のご理解、ご協力を得ている点についても心より謝意を表する次第である。

根岸邸の古器物陳列場について

新井　端

1　古器物の蒐集と陳列場の設置まで

根岸武香が古物の収集に熱を入れ始めた明治初年には大学（後の文部省）より「集古館」という博物館の設置構想を献言したことにより政府の博物館構想が動き出した。近代国家の建設には社会資本の一つとして博物館的施設の必要性が認識され、全国的な古物調査も開始された。明治 15 年には上野の地に帝室博物館として設置をみた。この間、明治 6 年にはウィーン万博に出品する古物等の蒐集の知らせは根岸らにも届いたかもしれない。友山・武香父子は東京での好古家たちの集会には度々出席しており情報に通じていたようだ。

また、武香の周辺では出土資料の発見も相次ぎ、明治 9 年中に発見のあった中条古墳群（熊谷市）出土埴輪群を取得している。三千塚古墳群（東松山市）でも埴輪類の発掘を行っている。翌 10 年には黒岩横穴墓群の発掘を実施し、15 年には胄山の根岸邸をＥ・Ｓ・モース等が来訪し蒐集品の見学をしている。20 年 5 月には武蔵国分寺跡での大規模な瓦発掘を敢行し、同年秋からは吉見横穴墓群の発掘を行ったことはよく知らている。おそらく明治 20 年ころまでに根岸邸には多数の蒐集古物が収蔵されていたと思われる。武香は単に古物の蒐集に傾いただけでなく吉見百穴墓群の保存活動を続けるなか、「新編武蔵風土記稿」や「史料編纂叢誌」の編集刊行などの出版活動も行っていた。蒐集した考古遺物の図版集の製作も意図していたという。さらに、自身の蒐集品を私蔵するだけでなく、展示場を設け広く展観に供することを実践した。

なお、武香は好古家同士の展示会や交換会の常連だけではなく、東京人類学会の発足間もないころには入会しており、考古学会や歴史地理学会に委員として所属している。専門的知識の吸収と研究にも意欲を見せ、県会・国会議員の活動を通じて多数の同好知己を得ており史料の交換や提供も行ったようだ。これらの交流や情報を得て最新の動向を知り、博物館的施設の建築という自己の展望を持つようになったと思われる。実際、名士連の胄山来訪を勧めたのは 20 年以降が目立つ。根岸邸の一画に設けられ古器物陳列場は「蒐古舎」あるいは「稽照館」と呼ばれた私設博物館とに云える施設だった。上述の背景を踏まえ根岸武香の創造した古器物陳列場の実態について現地根岸邸から報告する。

・徳田誠志 2011「関西大学区物館所蔵　旧神田孝平所蔵石棒について―明治六年開催「博覧会」の意義―」『関西大学博物館紀要』第 17 号

・根岸友山・武香顕彰会編 2006『友山・武香の軌跡』さきたま出版

２　古器物陳列場の紹介

根岸邸に造られた古器物陳列場についての具体的な報告は、熊谷市指定文化財の「根岸家長屋門に続く回廊状の西側長屋部分」がこれに相当するとした宮瀧交二の報告が最初である。この報告では古器物陳列場部分は長屋門の西側に続く南面回廊部分が該当し、桁行 10 間×梁行２間の規模である（写真１・２　図 2-1）。内部の南面は採光のため武者窓を開け、格子に柵状の鉄棒と二枚戸の障子が各々に入り、北側は土壁とし二段の棚を設けて展示棚としていた（写真 5）。かつてはこの展示棚に展示台・標本箱・展示架に置かれた埴輪や土器・石器類などの大物や小物が展示されたと想定している。展示棚の柱には階段状の加工を施し展示板の高さを調節する工夫がみえる（写真 4）。展示棚の前面はガラス戸で仕切られ、頭上の欄間部分には額状の展示架 20 枚を懸けおいていた。現在残る額板には縄文時代から古墳時代の土器片が取り付けられたまま残されており（写真 6）、かつての陳列場の面影を残している。これらを踏まえ埼玉

写真1　古器物陳列場　南西側の区画塀　　左方C区画　正面（隅部）B区画　右方A区画

写真2　A区画　廊状部分　武者窓　　階段と入口戸は後補

写真3　A区画の東側入口

写真4　A区画棚の加工

写真5　A区画の内部　奥から入口方向

写真6　A区画に架かる額状展示物

県下で最初に作られた博物館施設として貴重な遺構であるとの評価を与えている。

・宮瀧交二 2004「大里町冑山・根岸家の「集古舎」について―埼玉県博物館発達史の研究 1―」『埼玉県立博物館紀要』第 29 号

3　古器物陳列場の記録

根岸武香自身が残した記録に古器物陳列場に関する資料はほとんど見当たらないため、来訪した見学者の記録から古器物陳列場について記述した部分を次に見てみよう。

○記録 1　明治 28（1895）年 5 月 17 日

【―家いと広く元禄の造りなり　離れ家は古物収める所にて―】

・小中村清矩 1987「小中村翁日記―明治 28 年―」国会図書館デジタルデータ

○記録 2　明治 29（1896）年 1 月 5 日

【―武香君乃ち半七君をして所蔵の古物を陳列せしめて、石器時代の器具銅器時代の器具乃至土偶及び之に関する学士又は外国人より応答贈与せられたる器具等を示され其種類多くして実に数え難かりき。―中　略―余因て如何して斯の如き多くの古物を得られたるかを問へり武香君は之に関する答えは簡略なり曰く我性古物を好めり道を歩むにも油断せず畑を耕すにも注意を怠らず某所に墓を発いて器具を得たりと云ふ者あれば行いて之を求め某所に塚を穿ちて器物を得たりと聞けば行いて之を請い既に一二古器具を得れば従って他と交換する事あり以て今日いたれり物を集むる金銭のみに依る可らず唯夫注意の一点にあるのみと余その説に服す―】

・新井周吉 1988「幡羅高等小学校同窓会員横見郡吉見百穴遠足旅行記　（二）　根岸半七氏所蔵の古物を覧る」埼玉教育雑誌　第 150 号

○記録 3　明治 30（1897）年 11 月 8 日

【―かくて庭続きの離れ家の、古物室に入らむとするに、また石剣二個、石船とあざなするいと大きなるものめずらしきを、木の本につらね、古瓦及び古陶器のかげなどをも、そこらここらに、堆高くつみおけり。古物室の床には、豊公のかなの消息をかかげ、机上には鏃石を始て種々の石屬古物、百数十点重ね箱にいれて若干起きつらねたり、見もてゆくに、めづらかなるがいと多く、いまだ見ざるものも交れり。また土屬及び金屬の古物など、発掘せる品々、いと夥しくてかぞふる限りにあらず。此中に、百穴、また冑山、其ほとりここの近傍などより得つといふ物も多し。

―中略―　ことに目を新めしむるものは、奥まりたる所の戸棚に陳列する、土偶をはじめて、埴馬立物の類なり。その数のしたたかなる―】

・小杉榲邨 1989「あきの一夜」 根岸家文書中に確認

・内野勝裕 1995「武州松山学事始―紀行『あきの一夜』の紹介―」『歴史年報』第 2 号　埼玉県立松山高校歴史部

○記録 4　明治 33（1900）年 11 月 19 日

【―それより離れ家の古物陳列場なる稽照館に、一同いたり給ひて、くさぐの上古物、石属玉器土偶土器金属類、世間まれなる数百点を縦覧し給ふ、この室内には、かの百穴、また冑山の古墳を始めて、こゝの近傍より発見の、石玉土金属類の奇珍も多く見ゆ、さて庭づたいひに、もとの席に着き給ふ、苑内に石剣石船などあざする古器のいと大きなるを置きすえたる、皆驚かれぬ、なほ石剣の大なるもの、床の間にも見えたり、これみな本国にて発見せしものなりといふ―】

・小杉榲邨 1900「千とせのあき」 根岸家文書

・新井　端「好古家根岸武香の文化活動とその交友―小杉榲邨手記『千とせのあき』から」熊谷市史研究　第 11 号

○記録 5　明治 36（1903）年 6 月 20 日

【―古器物陳列室（写真版）根岸家邸内なる古物陳列室を、庭前より西北に向こうて望める様なり、撮影は蒔田鎗次郎君が好意に依りて成る、この室内にこそ君が多年の採集に関わる古墳石器両時代の遺物は序を追ふて陳列され、ただこの器物を観ても君が斯学に熱心（な）りしを追回するに難からざるなり―】

・大野雲外　柴田常恵 1903「図版考説」『東京人類学会雑誌』第 207 号

以上、前掲 1 ～ 5 の記録から古器物陳列場の姿を見ると、母屋とは別棟の「離れ」「離れ屋」にあると説明され、「古物室」「稽照館」「古物陳列室」「古器物陳列室」と様々に呼ばれていたことがわかる（本文では「古器物陳列場」の名称で説明）。古器物陳列場の名称については、「稽照館」以外は展示・収蔵資料の性質を表す名で、本来の名称とは思われない。「稽照館」は「守り伝え新たに想像する」という施設の理念を意味する言葉を選んでおり相応しいと思われる。なお、「蒐古舎」の名称も伝わっているが文献での確認が未だない。

施設の説明を見ると古器物陳列場には「床（床の間）」「机」があり、「奥まりたるところ」には「戸棚」がありそこは陳列場所であったことがわかる。この表記から、観覧用の部屋と戸棚のある展示場部分などとの機能の異なる部屋に分かれていたと考えられる。一度に 6 ～ 8 人程度の見学者の場合は陳列室に入っているが、記録 2 の場合では 70 人からの人数であったため、陳列室から広間など他の場所に主な出土品等の古器物を運び出して見学させたようだ。その際に蒐集方法を尋ねられた武香の返答も興味深い。

ここで記録 5 に掲載された「古器物陳列室」の写真（写真 7）を観察してみよう。画面には左下隅に「根岸邸古器物陳列室」の標題があり、本文中の説明には「根岸邸内なる古物陳列室を庭前より西北に向けて望める様なり」とある。立ち木が裸木であることから明治 36 年の冬に撮影されたと思われ、建物の外観が立ち木越しに写されている。この建物は瓦葺建物で瓦の葺き足方向から一部寄棟で切妻となり、切妻部分から右側建物部分の軒の出が異なることから梁行の少ない別室になる。寄棟部分の建物壁面は細格子の障子が入り手すりの着いた桟敷が付けられ対応する孫庇もみえる。

建物右側の壁は地から半ばまでは土壁を板壁で蔽いその上方は武者窓としている。下方には池の護岸となる玉石積があり、手前の池辺のラインは緩やかな窪み状となっている。手前には右に石棒、左に石皿、左方は築山上に小高くなり石灯篭が立木に半ば隠れて建つ。写真から知られるこの建物は宮瀧報告の長屋状の古器物陳列場（図 2-1）とは別物である。

2018 年の筆者の現地調査により、明治期に撮影された「古器物陳列室」は現在でもほぼ当時ままの構造で同じ場所に建っている（写真 8）ことが判明した。

4　古器物陳列場の実態

根岸邸の古物陳列場は記録 5 の古写真と現存建物（写真 1 ～ 15）の細部調査により、ほぼ現存していることがわかった。建物平面図は第 2-2 図のような間取りとなっている。立木を除いた外観は古写真と現況から第 1 図のように復元図を作成した。なお、記録 5 に説明のある、見通しの方向は「西北に向けて」とあったが実際には「西南」方向である。

次に建物平面図（第 2-2 図）から部屋の間取りと構造などの詳細を見てみよう。建物の位置は長屋門から派生し根岸邸敷地を取巻く南西側塀部分である（写真 1）。この位置に 3 つの区画に区分することのできる部屋があり、①南面回廊状の部分（A 区画）、②南西隅の広間部分（B 区画）、③西北側に区分された

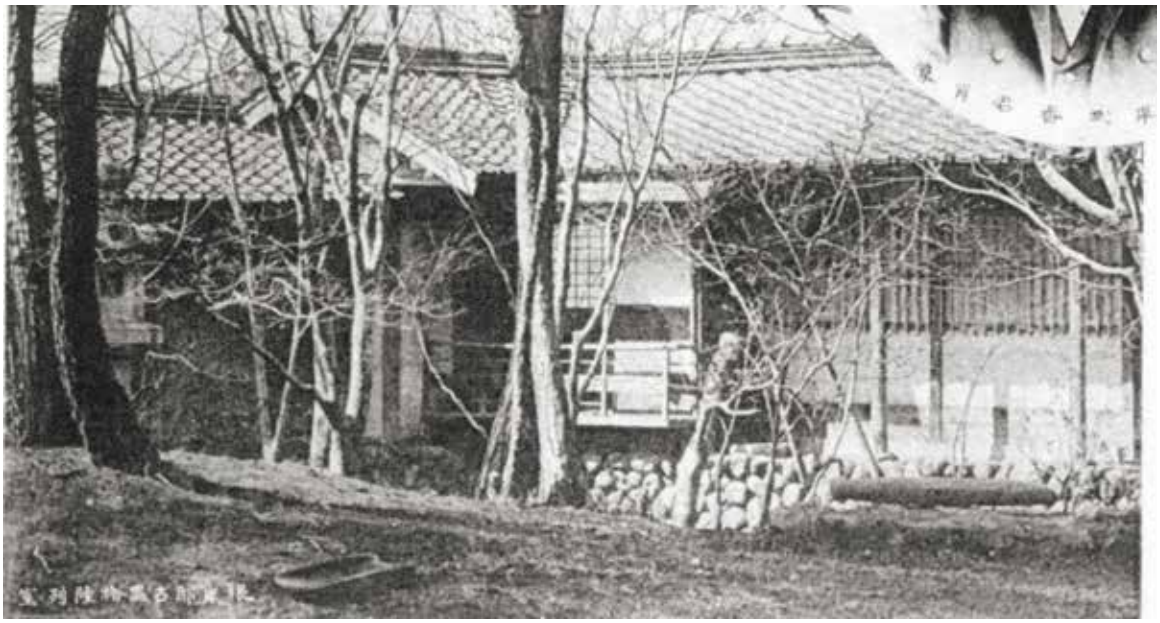

写真7　「古器物陳列場」　明治36年当時　邸内より南西方向

写真8　「現在の古器物陳列場」令和4年1月常緑樹の繁茂のため見にくいがほぼ当時の構造のまま

第１図　「古器物陳列場」の外観図　現状観察からB区画を補足

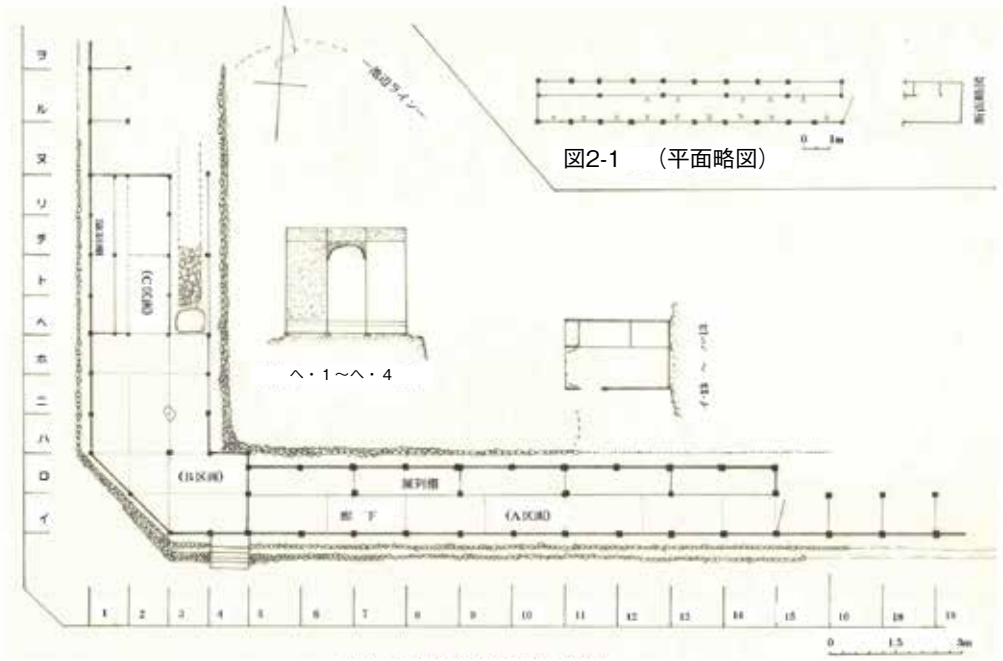

図2-2　根岸邸「古器物陳列場」平面図

部屋部分（C区画）から構成される。いずれの区画も邸内側に入口と戸障子の開放部を配している。南西隅部の邸外側に石段と入口が作られているが、当初はなかった設備である。

平面図（第2-2図）には柱筋に番付を割付けておりこれにより位置を示し説明する。A区画は「ハ5」から「イ15」まで桁行10間、梁2間の陳列棚を造作した長廊部分（写真2）であり宮瀧（2004）の報告部分に相当する。廊部分は6畳半を占め、床は健在で板張天井も良好に遺っている。南側は高窓で武者窓となっており鉄棒が柵状に植え込まれていたが、現在は窪み穴を残すだけとなっている。東端の「イロ15」の位置には開き戸があり（写真3)、現在の入口になっている。内壁と邸内側の壁、基礎の部材などに傷みが目立っている。

B区画は「へ1」から「イ5」の部分で4畳半と変形3畳に区分される。邸外向きの壁にはそれぞれ武者窓があり鉄柵が遺っている。床はすべて取り払われており「ニ3」に床束石が遺っている。天井も一部抜けているが、電気配線が遺っている。邸内向きの「へホニ4」に壁の痕跡はなく戸障子が備っていたようだ。「へ3-4」はB区画への入り口で開き戸であったろう（写真12)。このB区画はC区画とともに大正から昭和期には胄山簡易郵便局として貸し出されており、郵便局の移転後一時期貸家になったとされる。その後は倉庫的な使用がされていた。この期間中の部分的な改造の痕跡は「イ4-5」を新たな入口として開け階段と入口を設けたこと、「ロイ5」に土壁を作りA区画と区分したことなどがあったようだ。

AB区画の邸外向きの窓に入る鉄格子は当初からの防犯上の工作と思われる（写真1)。

C区画は「へ2-3」の部分にアーチ状の入口を設けており（写真12)、内部は4畳の広さでA区画と同様の棚が作られ展示板調節用と思われる階段状の加工も柱に遺されている。天井から壁には白土を塗装した痕跡があり（写真13)、窓も邸内向きしかないことから陳列場でありながら、収蔵庫的な機能を有していたと推定される。

路地となる「ヌ3」から「へ4」部分は庇下部分で母屋から「離れ」と呼ばれた古器物陳列場に入る導入路に当たる（写真9)。路面にはほぼ60㎝幅で石敷の替りに古代瓦を敷き詰めていた（写真10)。使用

写真9　C区画の入口

写真10　瓦敷きの通路

写真11　踏石利用の古瓦

写真12　B区画の内部、奥はC区画の入り口

写真13　C区画の内部　奥

写真14　邸内側から見たB区画（左側）、C区画（右側）　玉石積は池の護岸

されている瓦は南比企窯跡群や武蔵国分寺跡などからの採取品であろう（写真 11）。今は失われている戸口の踏み台石の手前までこの瓦敷きは続いている。この導入路に面した邸内側には玉石護岸の池があるが、現在池水はなく半分埋もれかけており、周囲には訪問者が愛でた楓が建物を覆い隠すまでの大木に成長している（写真 2）(註 1)。

以上、古器物陳列場の特徴を見てきたが、「天保 11 年（1840）甲山村根岸氏構内之図」では屋敷地内建物の平面図に長屋門と塀は記載されている。しかし、この塀に沿った南西隅は塀だけで古器物陳列場に相当する建物と池の記載は見当たらない。幕末期には私塾「三余堂」が南西隅に建てられていたが、明治時期に入り小八林の春日神社社務所に移転していることなどから、古器物陳列場は従前建物の改造や転用を行った施設とは考え難く、友山か武香の代による新たな建築に違ない。庭園整備や数寄屋風の意匠や国分寺瓦を踏み石に合わせて使用するなどの工夫は武香の趣向に違いないだろう (註 2)。

前述の記録類から推定しＡ区画は埴輪や土器や石器類を展示した「奥まりたるところの棚」のある【陳列室】に、Ｂ区画はＡ区画Ｃ区画との接点となり古物室への「入口」となっていた。部屋は外光を多く取り入れた居間のようでもあり、書を掛ける「床（床の間）」と「重ね箱」を置く観覧用の「机」のあることから【閲覧室】に、Ｃ区画は「棚」があり除湿の目的と思われる白土の塗装や倉庫状の造りから【収蔵室】に相当すると思われ、特に貴重品や図書・文書類を保管していたと考えられる。以上の三区画はそれぞれ展示、閲覧・研究、収蔵の性格別に作られたことは明らかで、個人設置ではあるものの近代博物館の持つ機能を具現しようとしたとも考えられる。BC 区画の現状は明治 36 年の撮影当時からは荒廃が進んでしまったが、そのような外観の変化はあるものの構造自体に変化は見られず、根岸武香が創造した施設博物館の復元は十分可能と思われる。

・栗原健一　2015「【資料紹介】胄山根岸家文書の「三余堂日記」熊谷市史研究第７号」

5　まとめ

根岸邸の古器物陳列場の実態はどのようなものであったかを知るため、現地調査に着手し、文献を漁歩しつつ検討を重ねてきた。結果として根岸家の「古器物陳列場」は博物館史上の稀有な遺存例として大略原形を現代に留めていると伝えたい。内部構造はＡ・Ｂ・Ｃ区画とした機能的な部屋割になっており、建築時期は明治 20 年代、完成時期は 20 年代後半と想定される。Ａ区画は現代まで残されたがＢＣ区画は後に改変を受けながらも原形を保っている。施設の変遷は収蔵史料の変遷とも関わっており、収蔵史料の詳細と具体的な展示なども今後の課題となっている。施設名称についても「稽照館」と確定するには資料が少ないためさらに資料調査を進め明らかにしたい。

現況の古器物陳列場は熊谷指定文化財の「長屋門」と一体のため留意されない部分があるようだが、初期の博物館的施設としても評価されて良い文化財建造物 (註 3) と思われる。残念なことに、現況は良好な状態とは云えず、虫害、腐朽、棄損の危機に直面しており、早急の保存対策が望まれる。

博物館活動の面でも先駆者であった根岸武香の遺産となる本施設がどのような構造を有していたかを正しく評価され、保存につながる足がかりとなるならば望外の喜びである。

文末ながら小稿作成のため現地調査をお許しいただいた根岸家の皆様、掲載の場を設けていただいた内川隆志教授には厚くお礼をいたします。

註

註１　根岸武香は胄山の自邸に来客を招く際には、楓が美しく紅葉したころを最適としていたらしく、誘いの口上には「胄山の紅葉」の観覧に添えて吉見百穴と根岸邸の古器物見学とを勧めている。来客たちが詠じた和歌や漢詩が同家に遺されており、小杉榲邨の紀行文「千とせのあき」「あきの一夜」などにみられる。なお、

根岸邸に植えられた楓は秩父山地に多く自生する奥山楓を移植したと思われる。

註２　瓦や土器などの考古遺物を数寄屋の装飾に使用した好古家は珍しくなく、明治期の好古家として著名であった市川團十郎は古瓦を粉砕し壁土に使用したという、武香と交際のあった久米田（吉見町）の内山温載も南比企窯跡の出土瓦を持っていた小室元長に瓦片の融通を請うなど明治 10 年代に好古家たちの間で古瓦が流行したようだ。武香も小室を通じて新沼窯（鳩山町）などを訪れている。根岸邸の瓦敷きは、格子叩き、布目の遺る平瓦のほとんどが国分寺創建期の重厚な瓦で、新沼窯などの南比企窯跡群の出土品であろう。

・内山手簡 27［明治 17 年］4 月 23 日内山手簡（小室家文書 140）埼玉県立文書館所蔵

・新井　端 2015『胄山根岸家資料報告（1）―考古資料・古瓦―』熊谷市史調査報告書第 1 集

註３　熊谷市指定文化財「根岸家長屋門」は江戸末期の埼玉県央部に遺る代表的な長屋門建築である。

・熊谷市教育委員会委員会編 2012『根岸家長屋門保存修理報告書』熊谷市デジタルミュージアム　読書室で公開

※参考として、古器物陳列場の記述部分のみを本文中に示したが、収蔵・展示・資料に関する部分を含め全文を掲示しておく。

記録１　　明治 28 年 5 月 17 ～ 18 日　小中村清矩「日記―明治 28 年―」

【―四時過ぎに根岸氏の家に着く　家いと広く元禄の造りなり　離れ家は古物収める所にてそこに入りてミれば石槌石剣雷斧石人金銀環勾玉の類あまたを陳列し、殊に土偶人埴馬の多くありて全体全く欠無したる弐っまであるは珍し瓮の類多しはいふ尽くせずこれは甲山又吉見の石むろより出でしもの多しといふ―】

記録２　　明治 29 年 1 月 5 日　新井周吉「幡羅高等小学校同窓会員横見郡吉見百穴遠足旅行記　（二）　根岸半七氏所蔵の古物を覧る」埼玉教育雑誌　第 150 号

【―明治 29 年 1 月 5 日午前 11 時余等会員 71 名を率い、根岸氏の宅に入れば半七君庭前に迎えらる。一同敬礼し余先づ同窓会員を率いて訪問したるの意を通ぜり、伴はれて一室に入れば会員貴族院議員根岸武香君ある在り。半七君と共に会員の訪へるを歓迎せられたり、是後進の子弟を重んぜらるる由なり。応答事須更、余等は所蔵の古物を拝見せんこを乞ふ、蓋し所蔵の古物は書画に古銭に或は古器具等種類甚だ多く一々拝見し得べきにあらず。故に本日は学術研究の大裨益ある古器物の一斑を示されん事を乞へり。武香君乃ち半七君をして所蔵の古物を陳列せしめて、石器時代の器具銅器時代の器具乃至土偶及び之に関する学士又は外国人より応答贈与せられたる器具等を示され其種類多くして実に数え難かりき。武香君懇々説明せらるるありて会員をして大いに発明するところあらしめられたり。今余の記憶の大略を挙ぐれば、石器時代にありては石剣、石鏃、環、勾玉、雷斧等其種類甚だ多く、銅器時代にありては古鏡、環、勾玉、剣等是又種類甚だ多く、土偶に至りては帝国博物館に至りても見得る能はざる者多く、金銀環を懸けたるあり腰靴を附けたるあり或は管玉首環を纏へるあり。一見を以て我国古代の風俗を察するに足れり、是以て人類学界乃至知名の古物家は往々ここに尋ねて学術研究の材料に供せし者ありしと。就中百万塔及び古代の玻璃器に就いては余深く感ずるものあり―中　略―余因て如何して斯の如き多くの古物を得られたるかを問へり武香君は之に関する答えは簡略なり曰く我性古物を好めり道を歩むにも油断せず畑を耕すにも注意を怠らず某所に墓を発いて器具を得たりと云ふ者あれば行いて之を求め某所に塚を穿ちて器物を得たりと聞けば行いて之を請い既に一二古器具を得れば従って他と交換する事あり以て今日いたせり物を集むる金銭のみに依る可らず唯夫注意の一点にあるのみと余その説に服す―】

記録３　　明治 30 年 11 月 8 日　小杉榲邨　　「あきの一夜」

【―かくて庭続きの離れ家の、古物室に入らむとするに、また石剣二個、石船とあざなするいと大きなるものめずらしきを、木の本につらね、古瓦及び古陶器のかげなどをも、そこらここらに、堆高くつみおけり。古物室の床には、豊公のかなの消息をかかげ、机上には鏃石を始て種々の石屬古物、百数十点重ね箱にいれて若干起きつらねたり、見もてゆくに、めづらかなるがいと多く、いまだ見ざるものも交れり。また土屬及び金屬の古物など、発掘せる品々、いと夥しくてかぞふる限りにあらず。此中に、百穴、また胄山、其ほとりここの近傍などより得つといふ物も多し。―中　略―　ことに目を新めしむるものは、奥まりたる所の戸棚に陳列する、土偶をはじめて、埴馬立物の類なり。その数のしたたかなる。まず余が記憶するはこの家を以て第一等に位しつべし其の第二等は、帝国大学にして、其の第三等はわが帝国博物館の所有なりとす。そ其他は論ずるに及ばざらん。亦この土屬品の

中に、鳥形の剣頭とおぼしきもの、こは必土偶の佩刀の欠け損はれしものなるべく、また鳳凰か鶏ならんなど見ゆる鳥首もあり。こは必はにものならんかし。猶くさぐさめづらしき帽（かぶり）をよそほへる、土偶の多かるを見ても、古事記の伊邪那岐尊の御冠めされしといふ古伝の、信ずべき徴となれる事ども既く別にしるせり。すべてこの古物室に二たび三たびはるばるものしてこまかに能く見とめ、よく考按を附すべきことども、氏にあらかじめ契おく―】

記録４　明治 33 年（1900）11 月 19 日　小杉榲邨　「千とせのあき」

【―それより離れ家の古物陳列場なる稽照館に、一同いたり給ひて、くさぐの上古物、石属玉器土偶土器金属類、世間まれなる数百点を縦覧し給ふ、この室内には、かの百穴、また冑山の古墳を始めて、こゝの近傍より発見の、石玉土金属類の奇珍も多く見ゆ、さて庭づたいひに、もとの席に着き給ふ、苑内に石剣石船などあざする古器のいと大きなるを置きすえたる、皆驚かれぬ、なほ石剣の大なるもの、床の間にも見えたり、これみな本国にて発見せしものなりといふ―】

○記録５　明治 36 年 6 月 20 日　大野雲外　柴田常恵 「図版考説」『東京人類学会雑誌』第 207 号

【―古器物陳列室（写真版） 根岸家邸内なる古物陳列室を、庭前より西北に向こうて望める様なり、撮影は蒔田鎗次郎君が好意に依りて成る、この室内にこそ君が多年の採集に関わる古墳石器両時代の遺物は序を追ふて陳列され、ただこの器物を観ても君が斯学に熱心（な）りしを追回するに難からざるなり―】

○記録６　明治 34 年 3 月 10 日　喜・小・藤 「百穴と松山城と」『歴史地理』第 3 巻 4 号

【―根本（岸）武香氏の宅を訪い其蔵する所の珍品を見る。埴輪勾玉類逸品甚少なからず。家屋結構構一に古物を蒐集し以て装飾をなせり―】

（喜－喜田貞吉、小－小林庄次郎、藤－藤田明　同会誌委員の 3 氏）

※本記録は陳列場についてほとんど触れないことから外した。

（あらい　ただし　　熊谷市立江南化財センター）

根岸武香旧蔵の重圏文鏡について

徳田　誠志

1　はじめに

わが国の考古学揺籃期に活躍した根岸武香については、埼玉県の名士として政治、経済に大きな貢献を果たしただけでなく、地元の遺跡や遺物の保護に大いに活躍したことが知られている。その文化財保護の一環として今でいう考古品を多数収集し、結果的に彼の自宅は考古学博物館のような機能を有していた。根岸は自らの収集品を一般に公開し、全国の好古家と幅広く交流した。その交流の証として、現在関西大学博物館に収められている人物埴輪は、根岸の所蔵品が同時代に活躍した神田孝平に譲渡されたものであることが知られている。

このように彼のもとには多くの考古資料が集まっていたが、その所蔵資料の一端を示す史料として『尚古写生』を本誌Ⅲ号において紹介したことがある（徳田 2020）。他にも彼の所蔵した資料については、没後に追悼記念号として刊行された『東京人類学雑誌』18 巻第 207 号に大野雲外と柴田常恵によってカラー図版とその解説が掲載されている（大野・柴田 1903）。

このように根岸は自らの収集品についていくつかの記録を残したようであり、その最も重要なものは、金井塚良一が紹介した『図録』であろう（小金井 1984）。しかしこの『図録』については、昭和 30 年代に小金井自身が実見した記憶があるというものの、それ以来長いあいだ行方不明となっており、その内容を知ることはできないでいた。ところが突然この『図録』が、國學院大學内川隆志教授によって発見された。筆者をはじめとして、根岸コレクションを知る全員が驚愕したことはいうまでもない。その詳細は別稿によることとしたいが、この『図録』こそ根岸コレクションの全貌を知ることのできる最良かつ唯一の史料である。その内容は予想通り精緻な図と着色がなされたものであり、根岸自身が惜しみなく予算と情熱を傾けて編集したことが窺われる。発見された『図録』には書名の表示がなかったことから、今回根岸の雅号から『榧園好古図譜』と命名し、以下『図譜』と表記する。

この『図譜』の発見を機に、再度現在の根岸家に残る考古資料等の調査と研究が計画され、筆者も参加する機会を与えられた。その際、これも驚くべきことに『図譜』にはその図が掲載されており、これまでにも存在は知られていたものの、根岸の没後 120 年以上ものあいだ行方がわからなかった青銅鏡を発見することとなった。その青銅鏡とは、1 面の重圏文鏡である。直径 10cm にも満たない小さな鏡であるが、この鏡の存在は北武蔵地域の古墳時代前期を考える上では、極めて重要な意味を持つものと考える。

以下、今回発見された青銅鏡について『図譜』等の史料に掲載されている状況と、鏡そのものの考古学的な観察結果を記述していきたい。その上でこの鏡の持つ意義について考察を進め、古墳時代における鏡研究や北武蔵の古墳文化を考えていく際の一助になれば幸いである。

2　重圏文鏡に関する既往の記録

本章ではこの重圏文鏡が、これまでどのように記録されてきたかについて整理しておきたい。先述したようにこの鏡の存在は根岸の生前中には彼が所蔵していたことは自明であったようであり、また、根岸自身が出土地などの記録を残している。本章では根岸の生前においてこの鏡の存在が明らかであった時期の記録と、根岸没後に鏡の情報だけが知られていた時期の記録に分けて記述を進めていきたい。

（1）　根岸武香生前の記録

重圏文鏡の記録について、まずは『図譜』に掲載された状況を見ていこう。今回発見された『図譜』は、合計 4 冊からなる。4 冊の内容については、大まかにではあるが「古墳時代の玉・金属製品」（＝『金属編』）、

「古墳時代の土製品（埴輪・土器）」（＝『土製品編』）、「瓦類」（＝『瓦編』）、「縄文時代の石器・土器」（＝『石器編』）に大別できる。このうち重圏文鏡は『土製品編』に所収されている（図１）。図に示したように鏡と同じ頁には、「双孔円板（鏡形石製品）」と「紡錘車形石製品」が掲載されている。次頁には「土製玉（土錘か）」が２連と「勾玉形石製品（平面図と側面図）」があり、他に図からは穿孔が見えないが管玉のような個体が描かれている。その後３頁にわたって合計13個の土器（土師器・須恵器）が掲載されている。この土器の中には縄文土器らしいものや、考古資料として土器と判断してよいか迷うようなものもいっしょに描かれていることには注意しておきたい。

先ほど『図譜』は主に材質別に考古資料を掲載していることを述べたが、青銅鏡であれば『金属編』とした「古墳時代の玉・金属製品」に所収されるべきである。実際、本誌Ⅳ号に掲載された「武蔵国比企郡大谷（岡）村大字庚塚」から出土した「六鈴鏡」は、この冊子に所収されている（新井 2021）。それゆえ重圏文鏡が『金属編』に掲載されず、『土製品編』に所収されたことは、この鏡は石製模造品や土器と一括して出土したものであって、材質を優先して所収する冊子を選定したのではなく、最も多数出土した土器を掲載する冊子を選択したものと考えられる。すなわち一括性を重視した結果であると考えられ、根岸自身がこれらの遺物の出土した経緯を含め、十分な理解のもとにこの『図譜』を編集していることを物語っている。

それでは描かれている重圏文鏡の図を見ていきたい。許可を得て『図譜』に掲載された鏡の図の横に実物の鏡を置いて写真を撮影した（写真１）。この写真を見れば明らかであるが、鏡の図は実物大に描かれていることがわかる。さらに鏡の詳細（櫛歯文様・圏線）についても、丁寧に描かれていることが看取できる。同様に鏡の断面図が添えられているが、この図も実物大に描かれているものと判断できる。すなわちこの『図譜』に掲載されている図は単にその形を写した図ではなく、今日でいう実測図として十分通用するものであることがわかる。さらに実測図以上とも指摘できる点は、図の色調も実物を忠実に再現するように努めていることである。この図を見るだけでも、改めて根岸がこの『図譜』の編集にかけた情熱を推し量ることができよう。

重圏文鏡の考古学的な観察は次章以降において行なうこととして、『図譜』に描かれている石製模造品について言及しておきたい。重圏文鏡と同じ頁に掲載されている双孔円板（鏡形石製品）と次頁にある勾玉形石製品については、その現物資料が根岸家に保管されている。その状況は写真２に示したとおりであ

写真１　『図譜（土製品編）』掲載の重圏文鏡と根岸家所蔵鏡

根岸武香『榧園好古図譜』表紙

冑山村字雷船木山下　出土品　1

冑山村字雷船木山下　出土品　2

冑山村字雷船木山下　出土品　3

冑山村字雷船木山下　出土品　4

冑山村字雷船木山下　出土品　5

図1　『榧園好古図譜（土製品編）』掲載の「冑山村字雷船木山下」出土品

るが、磨製石斧などといっしょに１枚の厚紙に綴じられた状態で保管されている。綴じられている資料の中には考古品としては疑問を残すものもあるが、双孔円板（鏡形石製品）と勾玉形石製品はその大きさと形状から判断して『図譜』に掲載されているものに間違いないと判断できる。

これらの資料は未報告であるが、実測図を作成された新井端の観察結果を援用して記述しておきたい[註1]。双孔円板（鏡形石製品）は、直径 7.8 ～ 8.0cm を測り、厚みは中央部分が最も厚く、端部にかけては薄くなるように整形されているが、最大で 0.8cm ほどを測る。中央に直径 0.2cm 弱の小孔が、２個並んだ状態で穿たれている。その孔は、ほぼ真っ直ぐ貫通している。写真からも明らかなように、一端が長さ６cm、幅最大２cm 程度割れており、写真では１つ離れた左側にその破片が括り付けられている。この割れた状況はまさに『図譜』に描かれた姿形と同じであり、根岸がこの『図譜』を編集した時点から２片に割れていたことがわかる。色調は灰色から青灰色を呈し、石材は滑石である。この石製模造品も実物大に描かれていることは明らかであり、断面図の正確さも同様である。

続いて勾玉形石製品は全長 3.5cm、最大厚 0.6cm を測る。頭部に直径 0.3cm ほどの孔が貫通している。断面厚は 0.6cm を測る。石材は双孔円板（鏡形石製品）と同様滑石であり、色調は暗灰色を呈する。断面形状が丸みを持たず、まったく偏平であることから玉としての機能ではなく、石製模造品として用いられるものと判断していることから「勾玉形石製品」と呼称しておく。

この２点が重圏文鏡といっしょに『図譜』に掲載されているものであり、今日まで根岸家に保管されてきた。その他にも写真に示したとおり、台紙には丸く何かが貼付けられていた痕跡を示す部分が確認できる。現在その資料は失われているが、明らかに台紙が変色しており「何か」が存在しいていたことは間違いない。この「何か」は大きさと丸いという形から、『図譜』の双孔円板（鏡形石製品）の右横に描かれている紡錘車形石製品の可能性が高いのではないかと想定している。紡錘車形石製品は厚みがあるため台紙に括り付けることが難しく、長い間（少なくとも台紙が変色する間）に落下した可能性が考えられる。現在ないものは「ない」としかいいようがないが、根岸家に残されていないか引き続き探索していきたい。

その他、次頁以降に描かれている土師器や須恵器についても根岸家に現在残されている土器と同定できる可能性がある。しかしながら土器類については正確な計測や写真撮影が未実施であるので、今回は現物

写真２　根岸家所蔵石製模造品他考古資料

の確認は保留しておきたい。

以上の通り、今回根岸家で120年以上の年月を経て発見された重圏文鏡は、間違いなく根岸が生前に編集した『図譜』に掲載されているものであり、同時に出土したと考えられる石製模造品のいくつかといっしょに根岸家に伝え残されてきたものである。しかしながら『図譜』には、この鏡をはじめとする資料がどこから出土したかについての記述は一切なく、またその名称さえ付されていない。このような文字記録がほとんど記載されていないことは、重圏文鏡に限らず他の資料についても同様の傾向が読み取れる。すなわちこの『図譜』は、徹底的に自身が所蔵する考古資料の姿形やその大きさ、あるいは色調や銹化の状況までを正確に描き残すことに重点が置かれており、根岸自身の考察や資料の意義については記述がほとんど見られないことが特徴といえる。このことは根岸がこの『図譜』を編集する意図を読み解く鍵であり、考察よりも考古資料を正確に記録しておくことに主眼を置いたものと考えられる。

次に、この重圏文鏡について記載された史料として『武蔵国大里郡吉見村誌』を見ていきたい。この史料についても新井端が報告しているので、その記述を援用しながら紹介していく（新井 2015a）。新井によればこの『武蔵国大里郡吉見村誌』は明治初期に政府が実施した皇国地誌編纂事業にともなって各村が作成した『地誌』が元の史料となっている。当然地元の名士であった根岸もこの事業に積極的に関与したものと思われ、根岸自身が調査した内容も盛り込まれている。現在この史料は埼玉県立浦和図書館に所蔵されているが、この史料は根岸家に保管されていた「副本」の可能性が指摘されている。そしてこの史料において『図譜』に掲載されており、現在も根岸家が所蔵している重圏文鏡と石製模造品、さらに土器の絵が残されている（写真３）。この図において最も重要なことは、これらの遺物の出土場所と出土年月日が明記されていることであり、次のように読み取ることができる。「胄山村字雷船木山下　明治十一年五月廿五日　堀地所獲　大サ如図」。この記述によって、出土地と出土年月日を知ることができる。出土地の考察は次章において行なうこととして、まずはこの絵図の内容を見ていきたい。

図の右上に「銅鏡」が描かれ、その下に「石鏡」が描かれている。この「銅鏡」がその図から重圏文鏡であることは間違いなく、「石鏡」が割れている特徴と２個の穿孔、さらに表面の研磨痕の表現から判断して、双孔円板（鏡形石製品）と判断できる。さらに「石曲玉」が勾玉形石製品であり、「石臼玉」と描かれているものは、現在行方がわからない紡錘車形石製品であることも間違いない。さらに『図譜』にある「土製玉（土錘か）」は、一連だけ描かれているが「陶管玉」に該当する。土器については「齋瓶」として３点の坩が描かれている。ここに描かれている図も着色はされているが、『図譜』には及ばない。また、重要なことはその大きさであるが、『図譜』が実大であったのに対し、この『武蔵国大里郡吉見村誌』は、あくまでも見取り図であることに注意しておきたい。報告という性格から当然であって、出土の事実を伝

写真３　『武蔵国大里郡吉見村誌』掲載「胄山村字雷船木山下」出土品図

えるものである以上十分なものである。しかしながら、長い間『図譜』が行方不明であって、重圏文鏡についての情報はこの『武蔵国大里郡吉見村誌』に掲載された図しかなかったことから、この図を計測した値が鏡の直径として使用されてきた。今回『図譜』と鏡の実物が発見されたことによって、この数値を訂正することができた。この点は、後述したい。

続いて根岸が生前中に、根岸家が所蔵していた重圏文鏡をはじめとする石製模造品を対象とした論考が発表されているので、紹介しておきたい。その論文は大野延太郎（雲外）が執筆し、『東京人類学雑誌』に掲載された「石製模造品に就て」である（大野 1900）。大野延太郎は 1863（文久 3）年に福井県で生まれ、1938（昭和 13）年に逝去した人物である。1892（明治 25）年に東京帝国大学人類学教室の画工として勤務し、その後同人類学教室で助手となり学術的な論考を発表している。教室を主宰した坪井正五郎が吉見百穴の調査以来、根岸家に出入りをしていた関係で大野も根岸家の資料に接する機会があったものと考えられる。冒頭にも記したとおり、根岸が逝去した際に刊行された『東京人類学雑誌』18 巻第 207 号の特集号は、大野と柴田常恵によってまとめられたものである。

大野による石製模造品の考察は、「土中発見の古物中に実用品ならざる種類の石製物あり」との記述から始まり、石製模造品に言及した論考である。そしていくつかの事例を取り上げ、その用途として儀式における使用を提示するなど、今日に続く研究成果を述べている。石製模造品の考察内容について今回は触れずにおくが、大野は 1 頁を費やして『武蔵国大里郡吉見村誌』に掲載された資料を図版として使用している。もちろんそのまま転載したのではなく、画工としての技量を発揮して勾玉形石製品や紡錘車形石製品については断面図も掲載している。しかしながら重圏文鏡の図面は実大とは記すものの、圏線が 2 本であって現物とは異なる点や櫛歯文帯も丁寧な描写とは言えない。鏡についても「銅鏡の簡単なるもの。周囲に線を刻みたるのみにして別段の模様無し。中央に鈕あり。少しく欠損せり。」と記述するのみである。論文の対象が石製模造品であるから、鏡についての考察は簡単なものであっても当然といえばその通りであろう。

しかしながら大野はこれらの遺物について、その出土地が「武蔵国大里郡吉見村大字胄山字雷」であることを明記し、根岸が所蔵していることを記す。すなわち先の『武蔵国大里郡吉見村誌』に記載された情報が根岸の生前は正しく伝えられており、出土品も根岸家が所蔵していたことを裏付ける根拠となるものといえる。

以上が重圏文鏡について、根岸の生前に記録されたものである。これらの史料から重圏文鏡は石製模造品と土器等がいっしょに出土したと伝えられていることがわかる。ただし、かつて紹介した『尚古写生』にはこの重圏文鏡他は掲載されていない。その理由としては『尚古写生』は明治の 10 年代までに編纂されたと考えられることから、明治 11 年に出土した資料が掲載されていないのは当然と考えられる。また、大野と柴田がかかわった『東京人類学雑誌』特集号に掲載されていない理由は、大野はこの資料は知っていたものの、根岸コレクションの中ではそれほど優品ではないと判断したことが考えられる。

（２） 根岸武香逝去後の記録

根岸武香は、1902（明治 35）年 12 月に逝去する。根岸の逝去によって彼の収集した資料は、世間の注意から薄れていったようである。売却されるようなことはなかったようであるが、少しずつ散逸していった可能性があろうし、また今回再発見された重圏文鏡のように根岸家の中でその行方がわからなくなったものもあろう。

こうして時が過ぎていくこととなるが、この重圏文鏡についてその後の報告は根岸の逝去から 40 年以上を経た第 2 次世界大戦後となった。その記録は『埼玉縣史 第一巻 先史原始時代』である（埼玉縣 1951）。新井によればこの『縣史』の原稿は 1941（昭和 16）年までには一応の完成をしていたが、戦争によって出版が延期され、1951（昭和 26）年になってようやく刊行されたものであると記載している（新

井 2015b)。

さて、この『縣史』の第 9 章「大里郡の古墳」にある「吉見甲山古墳」の項目において、根岸武香が所蔵していた重圏文鏡について、次のように記載された。「字雷の船木山下よりは石製模造品の鏡・円板・勾玉・紡錘車と六鈴鏡・鉄鏃・土師器・須恵器等を発見して居るので（後略)」。この記述において鏡の種類が「六鈴鏡」に置き換わっていることがわかる。さらに『図譜』や『武蔵国大里郡吉見村誌』には一切記述がない「鉄鏃」が加わっていることもわかる。『縣史』には図面も拓本もなく記述のみであって、何に依拠してこの記述がなされたのかは不明である。六鈴鏡とした理由は根岸がこの鏡式の鏡も所蔵していたことが原因とも考えられるが、鉄鏃も出土品に追記している理由はわからない。いずれにせよこの原稿がほぼできあがっていたとされる時点、すなわち 1941 年の段階で重圏文鏡を実見していないことは明らかである。

この『縣史』による誤記は、長くそのままとなっていた。例えば 1994（平成 6）年に国立歴史民俗博物館によって刊行された鏡の集成表にも『縣史』を参考文献として「六鈴鏡」と記載された（国立歴史民俗博物館 1994)。その後この間違いは、埼玉県立博物館に勤務された塩野博によって 2002 年に訂正された(塩野 2002)。塩野は改めて『武蔵国大里郡吉見村誌』と、大野によって『東京人類学雑誌』に発表された論考を取り上げて、船木山下から出土した鏡は「重圏文鏡」であることを論証した。しかしながら『武蔵国大里郡吉見村誌』に掲載された図を実大として計測した結果、面径を 7.3cm と記述している。この報告に基づき下垣仁志がまとめた『日本列島出土鏡集成』においても、7.3cm という数値が使用された（下垣 2016)。下垣は出土遺跡内容については不明とした上で、さらに共伴した遺物から鏡の時期を「古墳中期？」とする。しかし下垣自身が考える時期としては重圏文鏡であることを重視し、古墳時代「前期」と記述する。このことは後述するが、重圏文鏡そのものの研究が進展しており、近年ではこの鏡式が古墳時代前期に属するものであるとの理解が一般的になっていることの証左となる。

さらに最新の埼玉県における鏡集成作業は、東松山市で三角縁神獣鏡が出土したことをきっかけとしてまとめられている。そのなかでも本鏡については塩野の記述を踏襲し、図は『武蔵国大里郡吉見村誌』に掲載されたものが転載されている（東松山市教育委員会 2017)。この集成表の備考欄にも「現物なし」と記載されており、1902 年に根岸が逝去した後、120 年以上所在不明であったことが改めて確認できる。

以上、今回根岸家で再発見された重圏文鏡について、根岸の生前と逝去後に分けて、この鏡がどのように記録されてきたかをまとめてみた。120 年ほどの長きにわたって行方不明となっていた鏡が、その実大の絵図を載せる『図譜』の再発見と時を同じくして根岸家において発見された僥倖を改めて感じる次第である。

３　重圏文鏡の観察結果と類似鏡との比較

本章では今回根岸家で再発見された重圏文鏡の考古学的な観察を行なっていきたい。そして出土地点の検証を含めて、この鏡の持つ考古学的意義についての記述を試みる。さらには重圏文鏡のうち、ほぼ同じ面径をもつ資料との比較検討によって、根岸家が所蔵してきた鏡の特徴を見ていくこととしよう。

（１）　根岸家所蔵鏡の観察結果

根岸家の所蔵資料の調査は、2021（令和 3）年 9 月に実施した。その際、現当主の根岸友憲氏が「ここにも何かあったよな。」と言って取り出した小箱の中に、他の細々としたもの（考古資料ではなく日用品）といっしょにこの鏡が存在していた。特に厳重に梱包されていることもなく、ほこりをかぶっていることもなく、まったくそのままの状態でわれわれの眼前に登場した。この時点では、120 年以上行方不明となっている鏡とは思えないような邂逅であった。

以下、その際に観察した所見を記述していきたい（写真 4)。面径は今回改めて計測した結果、7.8cm で

あった。これまで『武蔵国大里郡吉見村誌』に掲載された図が実物の拓本であると考えられてきたことから、その図を計測して鏡の直径は7.3cmとして報告されてきた。しかしながら今回計測した数値とは異なることから、この図は実物の拓本ではないと考えるしかない。鏡背には擦痕が多数認められ、これは出土後に銹を削り落としたことを示しているように思われる。そのため地色としての銅色を呈している。このことは成分分析が必要であるが、銅の含有率が高いのかもしれない。現状での重さは、85 gである。

続いて鏡の詳細であるが、外区は無文であり幅は1.2cmほどを測る。縁は丸く研磨されており、若干の反りがある。この点を含め、重圏文鏡としては通有の形状である。内区はわずかに段を有して、外周に櫛歯文帯がめぐっている。櫛歯文は1 cmあたり5～6本である。主文様となる圏線は、4本である。鈕に一番近い圏線は、紐孔部分で一部途切れている。これは紐孔を形成するための中子を掛けた際に、圏線の鋳型を壊したものであろう。内側から二重目の圏線には、「珠文状結線文」が認められる。この珠文状の列点が意図的な文様であるか、鋳造の技術的な問題から生じたものであるかについては意見が分かれているところであるが、本鏡については二重目の圏線に明瞭に認めることができる。さらにこの二重目の圏線と三重目の圏線の間隔が、やや幅広くなっている。意図的であるか否かの判断はつかないが、この鏡の特徴といえよう。三重目と四重目の圏線については「珠文状結線文」が一部認めることができるところもあるが、二重目ほどの明瞭さはない。このような不明瞭な状態があるゆえ、意図的な文様であるか鋳造の技術的な結果であるかの判断が難しい。鈕は1.9cmほどを測り、鈕の大きさに対して紐孔が大きくあいている。紐孔の形状は、円形である。この鈕孔の中には土が付着しており、土中からの出土品で間違いないことを物語っている。

鏡面については写真に示したとおりであるが、一部銹化した部分を認めることができる。鏡面についても一部に擦痕が認められることから、銹を削り落としたと考えられる。鏡面、鏡背ともに布などの付着物は、現状では確認できない。

以上、今回の調査で根岸家から再発見された重圏文鏡について、観察所見を述べてきた。大きさや文様の特徴から『図譜』に描かれた鏡に間違いなく、さらには『武蔵国大里郡吉見村誌』に図が掲載されているものと同一鏡であると判断できる。さらには伝世品にとって一応その真贋を判断しておく必要があるが、文様の諸特徴や鋳造技法、さらに鈕の中に土が付着している状況なども勘案すれば、この鏡は古墳時代に属する真の考古資料であると判断することが可能である。

写真４　根岸家所蔵重圏文鏡（鏡背・鏡面）

（２） 根岸家所蔵鏡出土地の検討

次にこの鏡の出土した「遺跡」を、検討しておきたい。出土地の情報は『武蔵国大里郡吉見村誌』に記載された「胄山村字雷船木山下」という地名のみである。この地名から新井端は、鏡が出土した遺跡を「船木遺跡」と推定している（新井 2015b）。この船木遺跡について『熊谷市史』の記述から紹介していきたい（熊谷市 2015）。

船木遺跡の現住所は「熊谷市箕輪字船木」であり、根岸家から東へ直線距離で１km ほどの場所に位置する。現在は「船木台」という住宅地に開発されているが、かつては台地が拡がっていたことが『市史』に掲載されている古地図から読み取ることができる。遺跡の概要としては、『市史』に次のように紹介されている。「荒川右岸の比企丘陵北東端部に位置する集落で（弥生時代）後期後半～終末期には、縄文で飾られた在地の吉ヶ谷土器と東海系の土器が共に検出され、遠隔地域間交流を確認することができる」。遺構としては方形周溝墓・礫床墓・溝状遺構が検出されている。概要にも記載されているとおり、東海西部系の高坏が出土しており、型式としては東海地方の土器編年で用いられている指標の「廻間Ⅰ式期４～Ⅱ式期 1」に該当する。すなわち弥生時代終末から古墳時代初頭に属する土器と考えられ、この時期に東海地方との交流があったことを物語る。

さて、重圏文鏡が出土した可能性のある遺構としては、新井が想定しているように先述した方形周溝墓が考えられる。あるいは、礫床墓も候補となる。もちろんこの遺跡においては古墳時代から平安時代に至る時期不明の遺構が存在することから、墳墓ではない遺構からの出土も想定しておく必要はある。よって出土した遺構の確定はできないものの、確実に指摘できることとしては墳丘を伴うような「古墳」から出土したものでないことである。後述するように重圏文鏡は古墳以外から出土した事例が半数近くを占めており、根岸家所蔵鏡もこの事例に含めて考えられよう。

次に検討すべき事項としては、石製模造品と重圏文鏡が共伴したか否かである。船木遺跡においては、石製模造品が出土する時期の遺構は不明であり、古墳時代中期の遺物の報告もない。この船木遺跡は墨書土器も出土しているように、平安時代の住居址が検出されるなど長期にわたる複合遺跡であることは間違いなく、どこかに古墳時代中期の遺構が存在している可能性もある。ただし現在の情報では共伴したか否かについての確定はできないが、石製模造品と共伴したと考えるよりは、重圏文鏡そのものが古墳時代前期を中心とした遺跡から出土する事例が多いこと、そして船木遺跡ではこの時期の活動が活発であることから、古墳時代中期に属する石製模造品とは所属時期は異なっているものと考えておきたい。

以上、根岸家所蔵鏡の出土地の検討を試みた。鏡の出土した場所は現在船木遺跡であることと、墳墓か集落址かは不明であるが古墳からの出土ではないことを指摘しておきたい。さらには石製模造品と同じ遺構から出土した可能性は低いものと考えている。

（３） 茨城県勅使塚古墳出土重圏文鏡との比較

続いて根岸家所蔵鏡の特徴を看取するために、他の重圏文鏡と比較していきたい。比較する鏡の選択は、面径が同程度の資料とした。先述したように根岸家所蔵鏡の面径は 7.8cm を測るが、この大きさは重圏文鏡では最も大きいグループに属している。それゆえ大きさが等しい重圏文鏡と比較することによって、大きさ以外の共通点や相違点を見ていきたい。

比較する鏡は、茨城県行方市沖洲に所在する勅使塚古墳出土の重圏文鏡である。勅使塚古墳は霞ヶ浦北部の東岸に位置し、標高 20 m程の丘陵上に位置する。墳形は前方後方墳であり、全長は 64 mを測る。円筒埴輪と葺石はないが、墳丘上に底部が穿孔されている壺形土器がおかれていたと考えられている。内部施設は墳丘に平行する木棺直葬であり、長さ９m・幅１m程と報告されている。出土遺物は後述する重圏文鏡の他にガラス小玉 40 個、蛇紋岩製管玉 10 個と鉄剣１本が出土している（大塚・小林 1964）。

さて、出土した重圏文鏡であるが、調査を実施した明治大学の博物館に収蔵されている[註2]。以下、観

察結果を記述していく（写真 5）。面径は 7.7 ～ 7.8cm を測る。櫛歯文帯から外区の一部を欠損しており、さらに数片に割れている破片を接合していることから測定位置によって多少の違いが生じる。重量は現状の計測において、48 g である。外区は無文であり幅は 0.9cm ほどを測る。縁は若干研磨されており、反りは 0.2cm 程度である。内区の外周には幅 0.7cm ほどの櫛歯文帯がめぐり、櫛歯文は 1 cm あたり 7 ～ 8 条である。主文様となる圏線は 3 本であり、いずれも途切れることなく全周している。本鏡では外側の圏線と櫛歯文帯の間にやや幅があることが特徴であろう。「珠文状結線文」は内側の圏線に最も明瞭に確認されるが、真ん中と外側の圏線にも不明瞭ながら存在しているようにも見える。この鏡においても「珠文状結線文」を意図的に文様としているのか、鋳造の技術的な問題なのか判断することが難しい。鈕は 1.6cm ほどを測り、高さは 0.9cm 程を測る。面径に対しては丸く高い鈕となっており、紐孔の形状は隅丸方形である。全体に銹化が激しく、鏡縁の一部は銹ぶくれが生じている。鏡背の一部には繊維状のものが付着しているが、布の織目ではなく植物繊維のような状態が視認できる。銹化のため地金は確認しづらいものの、一部銀白色から灰色を呈している。このことは成分分析を行なう必要があるが、錫の含有率が高い可能性がある。鏡背の一部には赤色顔料が認められ、鮮やかな朱色を呈していないことからベンガラと考えられる。

以上が鏡の観察結果であり、続けて出土した古墳の時期を考えたい。出土した古墳は 64 m を測る前方後方墳であり、丘陵上に築造されているといえども墳丘盛土を有する古墳であることは間違いない。さらに 64 m という規模は重圏文鏡が出土した古墳としては大形であるといってよく、またこの霞ヶ浦一帯の古墳時代において最初に築かれた古墳である。その築かれた時期としては、墳丘から破砕して検出された土師器について、報告者が記すように「五領式土器の一群であろうが、後出的な要素が強い」ことを勘案すれば、4 世紀でも後半代に位置付けておくことが妥当であろう（茨城県史 1974）。重圏文鏡についていえば、古墳出土の鏡については「伝世」ということを考慮しなければならないが、4 世紀代の古墳出土例として考えておきたい。

以上、茨城県勅使塚古墳出土鏡について観察してきたが、根岸家所蔵鏡との比較検討を行ないたい。まず、鏡そのものの共通点としては、その面径（7.8cm）であって共に重圏文鏡としては大形の部類に含まれる。主文様の圏線は根岸鏡が 4 本、勅使塚古墳出土鏡が 3 本であるが、この違いに大きな意味は見いだせない。むしろこの圏線に一部は明瞭な、そして一方では不明瞭ともいえる「珠文状結線文」が認められることは、両鏡に共通している特徴である。

一方相違する点は、その重量である。根岸家所蔵鏡は 85 g であり、勅使塚古墳出土鏡は 48 g である。後者は一部欠損しているとはいえ、同じ面径でありながら倍近い重量の違いは大きいと判断したい。この

写真５　茨城県勅使塚古墳出土　重圏文鏡（明治大学博物館所蔵）

ことは当然手に持った感覚も異なり、根岸家所蔵鏡は鏡全体に重厚感があるのに対し、勅使塚古墳出土鏡は薄く、脆い感じが否めない。この違いが鏡本体の青銅成分によるものといえるか否かは理化学的な分析が必要であるが、色調も両鏡では大きく異なっている。もちろん千数百年のあいだ土中にあった環境の違いは大きいが、この点を差し引いても両鏡の違いとして指摘しておきたい。この違いがそのまま製作地の違いとまでいえるかについては慎重であるべきだが、面径やあるいは内区文様の形状がほぼ等しい、すなわち型式分類を行なった場合両鏡は同じ範疇に属することになろうが、鏡の理解にあたっては文様や形状だけでなく、鏡の厚さや重さも考慮する必要があろう。

もう一つの大きな違いが、その出土遺跡である。根岸家所蔵鏡については出土地名の検討から、現在知られている「船木遺跡」出土の可能性が高いと判断した。そして出土した遺構までは特定できないものの、少なくとも高塚式の墳墓からの出土ではないことは確実であると判断している。その一方、勅使塚古墳の鏡は間違いなく墳丘を有する古墳からの出土である。このような違いについてどのように考えるかについては、次章において重圏文鏡の研究史を踏まえた上で考察を進めていきたい。

以上、面径がほぼ等しい勅使塚古墳出土鏡と、根岸家所蔵鏡を比較してきた。面径が等しくとも相違点が少なくないことに留意しておきたい。

４　重圏文鏡の存在意義

これまで 120 年ぶりに再発見された根岸家所蔵鏡について、本鏡についての記録や鏡そのものの観察結果、さらには出土地の検討について記述を進めてきた。そして面径がほぼ等しい勅使塚古墳出土鏡との共通点と相違点をあきらかにしてきた。本章ではわが国出土の重圏文鏡についてこれまでの研究史を踏まえて、根岸家所蔵鏡の存在意義を考えていきたい。

（１）　重圏文鏡の特徴について

本節では根岸家所蔵鏡の理解を深めるために、重圏文鏡の研究史を概観しながらこの鏡の特徴を見ていきたい。重圏文鏡については明治時代から昭和前半期までは、大野延太郎の研究を紹介したように「銅鏡の簡単なるもの」という理解にとどまっていた。古墳時代の前期における鏡の出土状況は、舶載の三角縁神獣鏡や方格規矩鏡が先行し、その後わが国で製作された倣製鏡（「倣製」とは、中国鏡を真似て製作したという意味。）が前期中頃から出現し、重圏文鏡のような小形倣製鏡はその後に出現したと考えられてきた。しかしながら戦後の発掘調査事例の増加と相俟って、九州の弥生時代において倣製鏡が存在することが明らかになってきた。この結果、国内から出土した鏡を総合的に整理した樋口隆康は、これらの鏡について「古式仿製鏡」と呼称した（樋口 1979）。重圏文鏡については、大阪府枚方市鷹塚山から出土した鏡を紹介している。同時期に田中琢は直径 11cm 以下の鏡について「小型の倭鏡」とし、「舶載鏡に系譜がたどることが困難なもの」とした。さらに重圏文鏡については樋口と同様に鷹塚山出土鏡を取り上げ、「小型の粗製鏡と古墳時代に多量に制作された倭鏡との関係については、想像の域をこえる論はまだない」と結んでいる（田中 1979）。

他にこの時期に重圏文鏡に言及した論考として、先述した茨城県勅使塚古墳の発掘に携わった小林三郎によって、重圏文鏡の集成がなされた（小林 1976）。この時点で 11 例の出土例を示し、その分析において「出土遺跡の二相」として、古墳出土事例と集落址またはその類似遺跡から出土する事例が相半ばすることを指摘している。さらに勅使塚古墳を東日本における「地方（ぢかた）古墳」と位置付け、この古墳に重圏文鏡が副葬されていることについて「畿内勢力とはある程度の距離を置いた勢力の存在を示す」という見解を示した。

以上 3 人の研究を取り上げたが、1980 年代までに重圏文鏡は、弥生時代から古墳時代前期を考えていく上で重要な青銅鏡という位置付けが確定した。

その後1990年代において重圏文鏡の集成と型式分類が進み、この鏡の研究が一段と進展する。まず林原利明は24例を集成し、出土地の検討や分布について言及した（林原 1990）。そのなかで三角縁神獣鏡と共伴する事例があることを指摘し、さらに分布状況については北部九州から関東まで幅広く存在するが、特に北九州から瀬戸内沿岸、関東に至る沿岸において出土することを指摘した。これらの基本的な検討を進め、林原は圏線の数によって型式分類を試みた。しかしながら結果的には、圏線の数が必ずしもこの鏡の属性として有効でないことを示すこととなった。林原による重要な指摘としては、圏線において「円圏に認められる文様状のもの」を確認したことであろう。これは自身が関与した千葉県「駒形遺跡」出土の重圏文鏡についてレントゲン観察の結果確認したものであり、他の鏡についても同種の「文様状」のものを認めることができると指摘した。この時点では積極的に「文様」と見なすか、「技術的な要因」とすべきかの結論には言及していない。しかしながらこの「文様状」のものが珠文鏡に引き継がれていく可能性を指摘していることは、その後の重圏文鏡研究に大きな影響を与えている。さらに別稿においても重圏文鏡の分布が近畿以東に多く存在していることを指摘し、「東日本的な鏡」とした上で弥生時代の「小形仿製鏡」としての最終形態を示し、近畿以東を中心に弥生的な首長に象徴的に保有された鏡と位置付けた（林原 1993）。

この林原の研究と前後して、藤岡孝司によって新たに重圏文鏡の集成と型式分類が提示された（藤岡 1991）。藤岡は40例を集成し、5型式8分類の型式分類を設定した。この分類において林原が指摘した「文様状」のものを「珠文状結線文」として認定し、1型式に分類する属性とした。藤岡はⅠ型からⅤ型を設定した上で、重圏文鏡の変遷には「二つの方向」が認められるとし、その1つは弥生時代小形仿製鏡の最終形態として消滅するものであり、もう1つが「珠文状結線文」が珠文鏡の祖形となり、古墳時代小形仿製鏡への影響を与えたとするものである。そして鏡の製作地は畿内に求めるものとし、重圏文鏡は「生産地（畿内）以外に流通する目的のもとに生産された鏡」とする。

以上、1990年代における2人の研究を見てきたが、集成資料数の増加と精緻な観察の結果「珠文状結線文」という属性を見いだした。そしてこの文様が古墳時代の珠文鏡の祖形に繋がると考えることから、重圏文鏡に弥生時代的な要素と古墳時代へ繋がる要素を認める研究へと深化している。その上で祖形はどの鏡に求めることができるのか、さらに分布状況から製作地の推定、あるいは政治的な背景の有無等に論点が絞られてきている。

2010年代に入ると重圏文鏡の集成が一層進み、脇山佳奈によれば105面出土しており、そのうち文様が明らかなものは88面出土しているという（脇山 2015）。脇山はこの集成した重圏文鏡を、7類に型式分類した。そして圏線の創出にあたっては、銅鐸の双頭渦文飾耳にみられる渦巻き文様が、多重の圏線の創出に影響したとする。圏線という文様が中国鏡に祖形を求められないことは理解できるが、銅鐸に祖形を求められるか否かについては、他の青銅鏡の製作経緯についても考える必要があるため保留しておきたい。7つの型式分類においては、「珠文状結線文」を属性として1つの類型の設定を試みる。また脇山の分類に従えば、一重の櫛歯文帯を持つもの（4類）と「珠文状結線文」を持つもの（7類）によって、88面のうち55面がこの類型によって占められる。そのうち7類に属する重圏文鏡は、古墳からの出土する傾向があることを指摘する。このような分類によって編年観に言及するが、古墳時代前期（脇山のいう前Ⅲ期から前Ⅶ期）において、2類から6類までが併存している状況では、型式分類がどこまで時間差を示すかについて明確な結論を得がたいようにも思われる。製作地については近畿地方であることを結論として述べ、重圏文鏡は弥生時代終末期から古墳時代初頭における大和王権の統一と共に、広域的に分布した古墳時代の威信材とする。

続いて中井歩は、重圏文鏡のデザインが単純であるだけに文様による型式分類は困難であるとし、面径の大小を指標として分類する（中井 2018）。その結果面径が5.3～7.8cmを大型とし、3.0～4.7cmのもの

を小型とする。前者が 39 面を数え、後者は 27 面が出土しているとする。そして重圏文鏡の祖形については、奈良県見田大沢 4 号墳から出土している獣形鏡を介在することによって、上方作系浮彫式獣帯鏡に求めている。祖形を中国鏡に求めていることは、他の論者と大きく異なる点であろう。結論的には重圏文鏡は、畿内中央政権によって生産と流通が管理されていた可能性を指摘する。

以上のように、1970 年代からの重圏文鏡についての研究を概観した。この研究の積み重ねにより、重圏文鏡の所属時期としては弥生時代終末から古墳時代前期にかけてであることはほぼ確定した。また、出土した遺跡については「古墳」と「集落址」が拮抗している状況は小林三郎が指摘して以来、同様の傾向を示している。

その一方、編年観に有効な型式分類については、決定的な属性を見いだせていない。このことは重圏文鏡のデザインが単純であることから、今後とも文様による分類から編年観の設定は難しいように思われる。さらに出土事例についてはこの 50 年間において格段に増加しているが、北部九州から関東まで分布が拡大しており、東日本的という性格付けは難しくなっている。さらに重圏文鏡の存在意義、すなわち政治的な器物としての位置づけについては、畿内中央政権との関係において考える傾向が強い。しかしながら三角縁神獣鏡やその他の大型倣製鏡、あるいは中国鏡を模倣していない倭鏡との関係を十分に説明し切れているとは言いがたい。

これらについては今後の研究の進展によることとしたいが、これまでの研究史を踏まえて、根岸家所蔵鏡の存在意義を考えたい。

（２） 根岸家所蔵重圏文鏡の存在意義について

改めて根岸家所蔵鏡の特徴をまとめておくと、次のようになる。

・墳丘を持つ古墳からの出土事例ではない。

・面径は 7.8cm を測り、重圏文鏡としては大形であって、重厚感がある。

・不明瞭ながら「珠文状結線文」を有する。

これらの特徴を先学の研究成果を用いて考えると、根岸家所蔵鏡は「古墳」から出土している鏡に類似点が多いと判断できる。しかし本鏡は古墳からの出土でないことは明らかであって、諸先学の研究成果とは必ずしも一致するものではない。

重圏文鏡については研究史より弥生時代末期から古墳時代初頭にかけて存在していることは明らかであり、そのうち鳥取県青谷上寺地遺跡から出土した鏡には割れた鏡に穿孔して使用していることから、墳墓に埋葬することを意図せずに長期間利用していたことを窺わせる（写真 6)。もう 1 点指摘できることは、畿内の大形前方後円墳から三角縁神獣鏡、あるいはその他の大形倣製鏡と共伴することは皆無であって、

写真６　鳥取県青谷上寺遺跡出土　重圏文鏡（レプリカ）（青谷上寺地遺跡展示館所蔵）

全国的に見ても三角縁神獣鏡との分布傾向とは大きく異なっていることが指摘できる。三角縁神獣鏡と重圏文鏡が共伴した事例は、大分県亀甲山古墳、徳島県宮谷古墳の２例であって、三角縁神獣鏡が出土した古墳の数から見れば極めてまれなことといえる。関東地方においても三角縁神獣鏡は群馬県に集中するものの、茨城県・千葉県・神奈川県では１面程度の三角縁神獣鏡が出土するのみであるが、その一方で重圏文鏡は各県とも複数面が出土している。換言すれば古墳時代前期において出土する三角縁神獣鏡だけではなく、重圏文鏡も何らかの古墳時代の政治的な拡がりを反映していることに注意する必要を示す。その政治的な拡がりがどのようなものであるかについては鏡の持つ政治的な背景、あるいは祭祀的な背景を考える必要があるが、三角縁神獣鏡の分布だけではない重層的な古墳文化の拡がりであるとしておきたい。埼玉県の場合も 2011 年に東松山市高坂古墳群から､県内ではじめて三角縁陳氏作四神二獣鏡が出土した（東松山市教育委員会 2017)。この鏡も古墳の内部施設から出土したものではなく、原位置から離れていることに注意しなければならないが、大形前方後円墳から出土したものでないことは確かである。報告によれば、古墳群内の８号墳とする前方後方墳に埋納されていた可能性が指摘されている。

この三角縁神獣鏡はけして単独で突然出土したものではなく、周辺には根岸稲荷神社古墳、柏崎天神山古墳、諏訪山 28 号墳などが点在している。この高坂古墳群と根岸家所蔵鏡が出土した「船木遺跡」は直線距離で 10km ほど離れているが、北武蔵という地域設定で見たときには、重圏文鏡の存在意義もこの三角縁神獣鏡が出土していることを視野に入れておかなくてはなるまい。さらには「船木遺跡」からは、東海西部系の土器が出土していることも含めて考える必要があろう。東海系土器の存在は、古墳時代前期前半のすなわち重圏文鏡が各地に出土する時期と一致し、この時期に東日本における地域間交流を物語っている。しかし単純に古墳時代の開始期において畿内と東日本の関係を政治的な対立で見るのではなく、北部九州にもこの時期に重圏文鏡が出土するように、列島全体における大きな時代変化とみるべきである。

古墳時代の青銅鏡については、日本国内で中国鏡をまねて製作したとされる倣製鏡にしろ、わが国独自の文様構成を持つ倭鏡にしろ、鋳型が出土しておらず厳密には製作地は不明といわざるを得ない。あくまでも出土分布の状況から製作地を推定しているものであるが、重圏文鏡の場合、畿内での生産を納得させるような分布状況ではない。同様に出土状況も「古墳」でない場合が多いことは、古墳の埋葬儀礼用の鏡ではない可能性もある。すなわち古墳時代前期の青銅鏡については、すべてが同じ用途ではない可能性も考えておくべきである。

根岸家所蔵鏡は出土した遺構、共伴した遺物も明確とはいいがたいが、この１面の鏡が物語る意義の重要性を指摘しておきたい。

５　まとめ

今回、根岸武香が自らの所蔵品を描いた『図譜』が発見されたことを契機に、再び根岸家において彼が収集した考古資料の調査をおこなった。その過程で『図譜』に掲載されながら、120 年にわたって行方不明になっていた鏡が発見された。その鏡は面径 10cm にも満たない小形鏡であるが、埼玉県の古墳時代前半期を考えていく上では重要な鏡であると考えている。今回は根岸家に所蔵されていた鏡を紹介することに主眼を置いたが、今後この重圏文鏡文の原物にもとづいて当該鏡の研究が深化し、古墳時代小形青銅鏡の存在を考えていく上で有効な資料となっていくことを願って擱筆する。

註

註１　根岸家が所蔵している石製模造品については、新井端氏から実測図の提供を受けることができた。この考察できたことは、実測図に依るところが大きい。新井氏に深く感謝するものである。

註２　茨城県勅使塚古墳出土鏡は、現在明治大学博物館が所蔵している。実見にあたっては、同館学芸員忽那敬三

氏にご高配賜った。また、写真の掲載にもご高配賜り、重ねて御礼申し上げる。

参考文献

新井　端 2015a『胄山根岸家資料報告（1）―考古資料・古瓦―』熊谷市史調査報告書第１集
新井　端 2015b「第３節　熊谷の考古学研究の歩み」『熊谷市史』資料編１考古
新井　端 2021「國學院大學博物館蔵「六鈴鏡」―根岸武香遺愛の鈴鏡について―」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅳ　近代博物館形成史研究会
茨城県史 1974『茨城県史料』考古資料編　古墳時代　茨城県史編さん原始古代史部会
大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第２巻第３号 東京考古学会
大野延太郎 1900「石製模造品に就て」『東京人類学雑誌』15 巻 169 号 東京人類学会
大野雲外・柴田常恵 1903『東京人類学雑誌』18 巻 207 号（根岸武香記念号）東京人類学会
金井塚良一 1984「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10 埼玉県立博物館
熊谷市 2015「弥生時代の遺跡 14 船木遺跡」『熊谷市史』資料編１考古
国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集　共同研究「日本出土鏡データ集成」2 －弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成－
小林三郎 1979「古墳時代倣製鏡の一側面　―重圏文鏡と珠文鏡―」『駿台史学』46　駿台史学会
埼玉縣 1951『埼玉縣史』第一巻　先史原始時代　埼玉縣
塩野　博 2002「埼玉県出土の銅鏡　―古墳時代を中心として―」『埼玉県立博物館紀要』27　埼玉県立博物館
下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
田中　琢 1979『古鏡』日本の原始美術８　講談社
徳田誠志 2020「『尚古写生』と根岸武香の所蔵品について」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅲ 近代博物館形成史研究会
中井　歩 2018「古墳時代前期における小型鏡の系譜と変遷　―重圏文鏡・珠文鏡を対象として―」『埼玉県立史跡の博物館紀要』11 号　埼玉県立さきたま史跡の博物館
林原利明 1990「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について　―小形重圏文仿製鏡の様相―」『東国史論』第５号　群馬考古学研究会
林原利明 1993「東日本の初期銅鏡」『季刊考古学』第 43 号　雄山閣出版
東松山市教育委員会 2017『三角縁神獣鏡と３～４世紀の東松山』市制施行 60 周年記念事業シンポジウム　考古学リーダー 26　六一書房
樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
藤岡孝司 1991「重圏文（仿製）鏡小考　―3～4 世紀における一小形仿製鏡の様相―」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅴ　―君津郡市文化財センター設立 10 周年記念論集―
脇山佳奈 2015「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学考古学研究紀要』第７号

図・写真出典

図１　『榧園好古図譜』掲載図面　國學院大學内川隆志教授提供
写真１　筆者撮影　写真２　筆者撮影　写真３　『武蔵国大里郡吉見村誌』より転載
写真４　筆者撮影　写真５　筆者撮影（明治大学博物館所蔵）　写真６　筆者撮影（青谷上寺地遺跡展示館所蔵）

（とくだまさし　宮内庁書陵部陵墓調査官）

『榧園好古図譜』に所載された和鏡について

内川　隆志

はじめに

明治前期の名だたる好古家である根岸武香（1839-1902）を輩出した根岸家は、戦国時代には松山城主上田氏の臣として仕え、近世以降嫡流は菅谷に土着し、享保元（1716）に胄山村の名主に就任して以来代々伴七を名乗り、農業のほかに酒造業や舟運などで家財を築き地域を代表する名望家となった豪農である。同家の中で幕末維新期を生きた根岸友山（1809-1890）とその子武香によって地域史に留まらない多彩な文化活動を行ったことでも知られている。友山は、蜷川式胤や松浦武四郎といった当時を代表する好古家と接点をもっており、自身も古物蒐集家であったことが知られている[(1)]。武香が蒐集した古写経、古文書、地誌類などの蔵書は、昭和6（1931）年に帝国図書館に寄贈され、胄山文庫として、古文書類は埼玉県立文書館に寄託され、各分野の貴重な研究史料として公開、活用されている。

根岸武香は、根岸友山の二男として生まれ、嘉永3（1850）年、伴七と称して村名主役を勤め、父と共に河川改修や治水に政治的才能を発揮した。明治12（1879）年に最初の埼玉県議会の議員に選出され、翌明治13年議長となって、治水、教育、産業等幅広い分野に渡り県政に尽力、明治27（1894）年には貴族院議員に選出され、大隈重信の改進党に属して活動した。一方、考古学への興味関心が深く、明治10年頃に吉見村の「黒岩横穴群」を、明治20（1887）年には東京人類学会に入会、坪井正五郎と共に「吉見百穴」を発掘し考古学史に残る功績を遺し、E.S.モースをはじめ数多の好古家達と交流したことでも知られている。自邸には今も残る「蒐古舎」と命名したコレクションルームを設け、資料の公開と情報交換の場としたことでも知られている[(2)]。

本稿では、今も根岸家に残る根岸武香の蒐集した考古資料の内、和鏡の一部について報告するものである。なお、掲載している和鏡の実測は新井端氏による。

１、『榧園好古図譜』に所載された和鏡

武香の蒐集品に関する記録の存在は、金井塚良一によって紹介されていた[(3)]が、昭和30年代を境に行方不明となっていた。昨春、当該史料を偶然にも発見することが適い手許においてその内容を確認する事ができるようになった。内容の詳細については、研究との兼ね合いから稿を改めることとした。図譜は縦37.3cm×横26.5cmを計り、布表紙は手書きの花柄で装丁され、その中心に外題を揮毫するために長方形の空白を空けているものの、空白はそのままであったため、図譜の名称は不明である。今回名称を決定するに際し、武香の雅号から4冊からなるこの図譜を『榧園好古図譜』と命名し、國學院大學で保存管理し後世に伝えることとした。

『榧園好古図譜』第3冊には、勾玉等の玉類・上古刀・刀装具・青銅器・武具・馬具・甲冑・鰐口・百万塔等と共に5面の和鏡が所載されている（図1）。八稜鏡が1頁に単独で描かれ、疑漢式鏡を中心とした残りの4面は1頁にまとめて掲載されている。何れも原寸大で面相筆によって全体の輪郭と文様を描写し、実物の和鏡に色彩を合わせた顔料で全体の色調を整えている。その際、縁下や界圏付近に陰影を施し和鏡全体に立体感を出す工夫がなされている。何れにしても技量の高い画工の手によるものと判断できるが現在のところ作者は不明である。

2、和鏡の実相

『榧園好古図譜』第3冊に所載されている5面の和鏡は、現在も根岸家に現存し、ここに記録された和

鏡以外の鏡鑑コレクションも認められるが、今回は『榧園好古図譜』第３冊の所載資料に限定して報告するものとする。１頁に１面のみ掲載されている１の瑞花双鳳八稜鏡は、素鈕を中心に上下に瑞花、左右に鳳凰を対向させ、外辺には唐草文が退化した列点表現が認められる。八稜は部分的に錆化が著しい。時期的には 11 世紀末の所産であろう。2 の秋草鳥蝶鏡は外区下部に野草を配置し、中段より上部に７頭の群蝶を散りばめ、内区には薄、竜胆、女郎花の咲き誇る野原を１頭の蝶と双雀が遊飛する情景が表現されている。遺存状況は健全である。3 の牡丹双鳳鏡は所謂疑漢式鏡と呼ばれるもので内区には左右に開花する牡丹を描き、上部には飛遊する二羽の瑞鳥が描かれている。界圏の内側と外側に輻線文、珠文による圏帯が廻らされる。4 は、内区に屹立する松樹に波濤表現と沖を航行する二艘の帆船と飛翔する双雀が表現される。界圏の内側と外側に輻線文、珠文による圏帯が廻らされる。5 は、内区に亀鈕と接嘴する二羽の鳥と散りばめられた菊花が表現されている。全体に褐色に変色しているのは火中した結果であろうか。5 面共に出土地、伝来を示す情報等は認められない。

番号	名称	年代	面径（cm）	縁式	界圏	鈕式	金質	備考
1	瑞花双鳳八稜鏡	11世紀	8.8	斜縁	―	素鈕	青銅	
2	秋草鳥蝶鏡	13世紀	10.8	直角式中縁	単圏細線	花蕊中隆鈕	青銅	
3	牡丹双鳳鏡	14世紀	11.1	直角式中縁	特殊圏	花蕊中隆鈕	青銅	疑漢式
4	帆船図双雀鏡	14世紀	10.2	内傾式中縁	特殊圏	花蕊中隆鈕	青銅	疑漢式
5	菊花散双鳥鏡	14世紀	8.8	内傾式中縁	特殊圏	亀鈕	青銅	疑漢式

表１　和鏡一覧

おわりに

以上、『榧園好古図譜』第３冊に所載されている５面の和鏡について紹介した。埴輪などの考古遺物を好んだ武香のコレクションの中では少数波であるが、武香の好古趣味の一端を示す意味で興味深い資料群と言える。資料化に際し、根岸友憲氏、新井端氏、富山悠加氏、高橋桃子氏のご協力を得た。心より感謝申し上げる次第である。

註

(1)　重田正夫　2014 「明治初期における武の『好古家』根岸有山と武香（上）－上中条村出土の埴輪と黒岩村横穴群の発掘を中心に－」『熊谷市史研究』第６号　熊谷市教育委員会　pp.36-39

(2)　宮瀧交二 2004「大里町冑山・根岸家の『蒐古社』について　埼玉県博物館発達史の研究・1」『埼玉県立博物館紀要』第 29 号

(3)　金井塚良一 1984「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10 埼玉県立博物館

（うちかわたかし　國學院大學教授）

図1　『榧園好古図譜』第3冊　所載の和鏡　縦37.3cm×横26.5cm

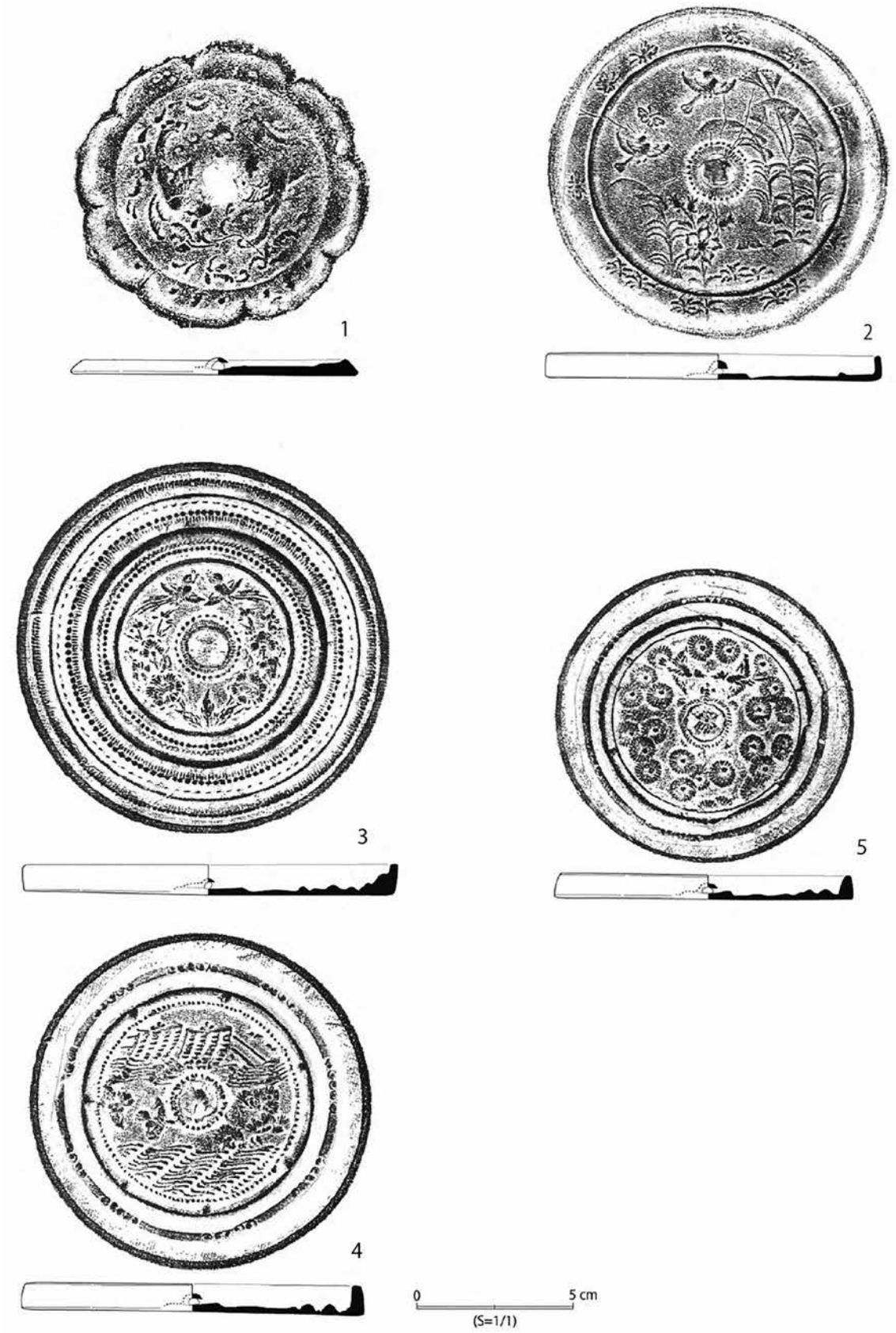

図2　和鏡実測図

写真1　和鏡

根岸武香旧蔵松浦武四郎画「アイヌ舞踊の図」について

五十嵐聡美

はじめに

松浦武四郎の筆による「アイヌ舞踊の図」は令和３年９月４日の根岸家調査の際に同家の蔵内から発見されたもので、松浦が得意としたアイヌ舞踊である「鶴の舞」を画題とした傑作である。本画は為書きにもあるように松浦が根岸武香に贈ったものと推定され、松浦と根岸の交友を示す貴重な資料でもある。本稿は、その詳細について報告するものである。

1　基本情報

名称：松浦武四郎筆「アイヌ舞踊の図」

製作年：明治 14（1881）年

寸法：（全体）タテ 193.5cm ×ヨコ（軸棒含む）69.8cm

（本紙）タテ 126.5cm ×ヨコ 42.0cm

所有者：根岸友憲

揮毫：

風餐露臥了吾願 編喜蠻荒齎命還 木幣

削來 祝蘇胞雲間遙拝阿寒山

明治十四歳次辛巳中冬根岸大兄屬繪併録舊製　北海道人松浦弘

2　画題

画題は、松浦武四郎が得意とした「アイヌ舞踊の図」である。武四郎自詠の漢詩を取り囲むように男女が輪になって鶴の舞を踊り、カムイノミ（神祈り）をするエカシ（長老）を中心に、男たちが車座になって賑やかに酒宴している様子を描く。

鶴の舞および酒宴は、代表的なアイヌ絵の画題で、武四郎もアイヌ絵といえば「舞踊の図」を好んで取り上げ、長年に渡り繰り返し描いていた。

武四郎描く「舞踊の図」の初期の例としては、安政６（1859）年刊行の『蝦夷漫画』収録の「鶴の舞」がある。ここでは、10 人の男女が輪になって踊るが、このあと作画を重ねる度に、踊り手の数は 20 人、30 人と増えていく。北海道博物館所蔵の「アイヌ舞踊の図」では、縦長の掛け軸いっぱいに長蛇の列をなしてエカシ、フチ、そして子どもたちが踊る。さらに、踊りの列が輪をなして大きく広がっているのが、本作となる。踊りの大円弾は、軸の縦長の画面には収まりきらず、踊りの列は、一度紙幅から飛び出し、見えないところで弧を描き、また画面に戻ってくるという大胆な構図をとっている。

3　描写

本作の見どころは、武四郎の闊達な筆による人物の柔和な表情と動きであろう。歌い、踊り、笑う人々。各所には、じゃれあう犬猫が小さく描かれて、犬は犬なりに、猫は猫なりに鶴の舞に参加している。そうした俳画に通じるような親しみとおかしみも、本作の味わいといえる。また、武四郎の速筆の妙と呼応しているのが自詠の漢詩で、その力を抜いた柔らかい筆による書風も、本作の魅力のひとつである。

4　漢詩

武四郎自詠の漢詩は、文久元年（1861）年刊行の『久摺日誌』の末尾に記載されている詩で、大意は、厳しい旅を終えたが、未開の地を踏査するという願いを成し遂げ、無事生還できたことを喜んでいる。イナウを削り雲間から望む阿寒山を人々と拝み祝うというもの。思い入れのある詩だったようで、「風餐露臥」の詩を書き入れた「舞踊の図」が本作含め、3 例が確認されている。

5　制作の背景「蝦夷地への思い」

武四郎は、28 歳から 41 歳まで、あわせて 6 度に渡って蝦夷地を調査している。武四郎のアイヌ絵は、そこで出会ったアイヌの人々に寄せる心を形にして描いたものであり、異風を説明的に紹介しようとするアイヌ絵とは、一線を画している。

「舞踊の図」に見るどこまでも続く踊りの輪。いつまでも続く祭の宴。そこには、アイヌの人々の絶えることのない繁栄を願う武四郎の気持ちが込められているように、私には思える。

（いがらしさとみ　北海道立三岸好太郎美術館副館長・学芸員）

松浦武四郎画「アイヌ舞踊の図」

令和３年度　日本学術振興会科学研究費助成事業　基盤研究Ｃ課題番号21KK01002

人文資料形成史における博物館学的研究
根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 Ⅰ

令和４年２月28日発行

編　集　　内 川 隆 志
連絡先　　〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28
　　國學院大學博物館学研究室
印　刷　　ヨシミ工産株式会社